
天使の言葉

海南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の言葉

【著者名】

Z6189E

【作者名】

海南

【あらすじ】

変わり者の修道士、ロン＝フィンダン。そして僕。変わらない平凡な日々に、いつもロン修道士は僕に語りかける。世界のことや、命のことなど・・・。これは、そんなロン修道士と僕の会話の記録。

太陽がかなり上方へ登つてきた時刻に、僕は教会に来ていた。窓から漏れている陽の光が、けつこう強いため、わざわざ蠅燭の火を灯さなくても手元の聖書の内容は十分読める。

たくさん並んでいる椅子の最前列に座り、パツと聖書を開く。目当てのページを見つけ出すまでに、そう時間はかからなかつた。僕の名はレイズ＝カーマー。といつても、この名はもともとは僕のものではなかつた。

第一次世界大戦後、勝者であるアメリカでも、身寄りのない子供たち つまり、孤児はそう少なくはない。僕は、生まれてすぐ両親を戦争のせいで亡くした。その時の記憶はない。裏通りの捨てられているところをたまたま通りかかつた聖職者の方に拾われて今に至るのだ。

レイズ＝カーマーという名も、そのときに付けてもらつた。

ステンドグラスを通して映る光の模様がとても美しい。しばしその光の芸術に見とれてから、手元にある聖書に目を落とす。

心を落ち着かせたいとき、不安を感じるとき、一人になりたいときには、必ず協会に来る。わざと難しそうな聖書を持ち出して、読むわけでもないのにペラペラと捲る。途中に出てくる挿絵に目を楽しませながら。いろいろな考えを巡らせている。

だから最初、協会に入ってきたもう一人の人物に気付けなかつた。

「 生きるとは、どういうことですか？」

突然聞こえた声に、一瞬驚いて振り向く。

そして、彼を見つけると、つい笑顔になつてしまつた。

ロン＝フインダン修道士。いきなり現われてはいつの間にか消えているという。かなり変わつた人だ。空に向かつて大声で「オオー！！神よ！！！」と叫ぶときもあるし、名前も知らない花に深々と頭を下げていたりと、けつこう可笑しい行動が多いため、他の修道

士、子供には笑い者にされている。

でも僕は、そんなロン修道士がとても好きだったのだ。

変だ変だと馬鹿にされながらも、子供に大きな愛で接し、小さな命も大切にする。何より、あの裏通りで奇跡的に僕を見つけ出し、保護して下さったのがロン修道士だったのだ。

だから子供のころ、一番最初に心を開けたのは、ロン修道士だった。ロン修道士の後ろをテテテツと付け回していた頃には、周りのみんなに「レイちゃんはロン修道士が大好きなんだね（ハート）」と何度も言われたが、それは間違つていなかつたし、今でも変わらない。

ふと気が付くと、二口二口と人の良い笑顔のまま、ロン修道士は僕のすぐ傍に来ていた。

返事を待つてゐるらしい。

「あなたの意見でがまいません。生きるとま、どうこうひとですか？」

「ええ・・・・・・・と」と悩んでゐるフリをしながら、チラリと時計を盗み見る。一時三十分。ロン修道士の話は最低でも一時間はする。

早くても三時三十分。最悪で六時か。

よしひ、と腹を括り、さつきの質問の答えを考える。だが、それほど深く考える必要はなかつた。

「生きるとは、息をすることです。自分の意志で行動し、自分の感情で人と接することです。この世に存在し、命あるままに動くことです」

「よひしー」

うんうんと何度も深く頷きながら、ロン修道士はとても満足した笑顔だつた。そして言つ。

「では、死ぬこととは？」

質問が一つで終わるとは思つていなかつたし、きっとこのことを言つだらうと見当をつけていたので、その質問にはすぐに答えること

ができた。

「死ぬとは、息をしないことです。自分の意思を持てず、感情は生まれず、この世界に存在する」ともできません」

「なるほど」

そう言つてもう覚のがとても嬉しくて、顔を綻ばせてくると、ロン修道士は予想していなかつた三つ目の質問をしてきた。

「それでは、死んだよつて生きるとは？」

「えつ、えーと……」

この質問に、僕はとても焦つてしまつた。

死んだよつて生きる……だから生きはい。だけど死んだようつてなんなんだ！？

悩み続けている僕を、ロン修道士は楽しそうに眺めていた。

「答えを聞かせてください」

「…………し、死んだよつて生きるとは、辛うじて息はして
いて」

「ほう、それで？」

「ええつと、意思は…………無いから動けない…………？」

「なるほど…………それで？」

「感情というのもきっと無いから」

「それでは死ぬことと変わりないので？」

「だから息をしていて」

「では死ぬといつことは？」

「それすらもしな」

「生きるといつことは？」

「…………」

これは、その場凌ぎでしかない回答だとこいつ」とい、今やつと氣付いた。ロン修道士、もっと人の考えが詰まつてこる、そんな言葉を求めているのだと。

本当の答えではなく、僕の考えを。

「息をするだけ…………では、やつとないと思こます。意思通

りに体が動くだけ、とか、感情を表にぶつけるだけ、とも違う。体の動かない人も、感情を上手く表せない人も、明日にでも死んでしまいそうな人でも・・・・・。やっぱり生きているんです。誰一人存在が分からぬひとでも、やっぱり生きているんです。だけどわたしには、わかりません。命があれば、だれでも生きているのですか？命がなければ死んでいるのですか？目に見えて、手で触れられるものしか、生きていないのでしょうか？・・・・・・・・・・・・わたしには分りません。生きるということが、死ぬということが、ロン先生。教えてください。生きるというのと、死ぬというのとを、本当の答えを」

真っ直ぐに見据えた先には、ロン修道士の穏やかな瞳が僕の目を少しも逸らさずにしつかりと見つめていた。

唐突に、ロン修道士は話しお出した。しかし僕にはそんなことなどいつでもよく、ただ答えが聞きたくて必死に耳を傾けていた。

「生きるとは、一体どういうことでしょう？死ぬこととは？命の重さ、長さ、大切なは？誰も、正しい答えなんて本当は知らないんですよ。何も知らない中で、必死に自分の答えを探しているのです」

「では、ロン先生の答えとは？」

頷くとロン修道士は、恥ずかしそうにしながらも、しつかりと答えてくれた。

ロン修道士の、答えを。

「わたしは、生きることと死ぬこと、裏表というわけではないと思つのです」

「なぜですか?」

「それはですね。人はみんな、生きながら死んでしまう」ともありま
すし、そして、死んでしまってもなお、生き続けている」ともあ

るからですよ・・・・・。生と死とは、きっと『マインの裏表』のような単純なものではないのでしょうか？

ロン修道士の言っている意味がよくわからなかつた僕は、少し首を傾げて黙りこくつてしまつた。

それを見て、「説明が少し足りなかつたみたいですね」と苦笑しながらロン修道士は話して下さつた。

「わたしの思う生きるということは、心の中に、あるいはもつと深い仲に一つの小さな炎を燃やし続けていくことです。その炎が、生命の命なのか感情なのか・・・・・。そういうことはあまりよくわからりませんが、それ燃えている炎がフッと消えてしまうことを、死んでしまうというのではないでしようか？ですから、生きていながらも、心の中の炎が消えてしまつている人もいますし、死んでしまつてもまだ、炎が荒々しく燃え盛つている人もいるのでしょうか。その人は、生きているのか死んでいるのか。わたしにはさっぱりわかりません」

「心の中の・・・・・炎ですか？」

ボソッと呟いた言葉に、ロン修道士は敏感に反応して「はい」と言った。それでも僕の中には、まだわからないことがありすぎたのだ。

「わたしの中にも、勿論あなたの心中にも。心の中で炎はもえているのですよ。小さくても、消えること無いように、いつまでも続くよう」と、必死になつて燃え続けているのです」

炎が燃えていれば、死んでいない。しかし僕にはそれがよくわからなかつた。

「命はなくなつてしまつても、炎が燃えていれば死んでいないのですか？。でも・・・・・命をなくして死んでしまつ」と。僕にとってはそれが一番の恐怖です」

そう言うとロン修道士は、少し困つたような、そしてとても悲しそうな顔をした。胸にそつと手を重ねると、一言一言をしつかりと囁み締めるようにゆつくつと言つ。

「誰でも生命がなくなることはとても恐ろしいことです。とても痛

いですし、とても寂しいことだとおもうからでしょう。ですけれど、そんなときにはこの言葉を思い出して下さい。“怖いのは生命^{いのち}が無くなることではなくて、生きる気持ちが無くなることです。心の炎はいつまでも燃え続け、わたしたちを照らし続けてくれるでしょう”

生きる気持ちが無くなること。それは、世界に絶望してしまった人たちのことを言つているのだろうか？ そう考えると、悲しく、やりきれない気持ちで一杯になってしまった。

「先生は、いつもそう思いながら生きているのですか？」

するとロン修道士は少し驚いたような表情となり、そして“心配いらないいよ”と言つような優しい笑みを浮かべて答えて下さった。「わたしも人間です。死に対する恐怖は勿論あります。しかし、毎日をそうビクビクしながら生きる必要はないのですよ。生きている物全て、一日一日を楽しむ権利があるのです

「命を無くしてしまった人たちもですか？」

「勿論です」

死に対する恐怖と向き合つて、毎日を楽しく過ごす。それが、全ての人間に与えられた権利なのだ。けれど、世界にはそれができない人がたくさんいる。

ロン修道士は、できているのだろうか？

「先生は凄いですね」

「そんなことはありませんよ。毎日を楽しんで生きていいくことに意味があるのです。わたしもいすれ死んでしまつ身ですから」

そう言つてからロン修道士は、

「けれどわたしは、心に燃えている炎が一体なんのかわかりませんから・・・・・・まだ死ねませんね」と、付け足すように言つてから、キレイに笑つた。

そしてロン修道士は、「嗚呼、もうこんな時間になってしまった。早く戻られければ」といながら教会を出て行つた。

時刻は九時。あれから六時間三十分も経っていた。

あのじひの僕は、ロン修道士の言葉を半分も理解できていなかつた。

今でもわからない」とはたくさんある。

せめて、あの言葉は忘れないよつこと、じに書き残しておきた

い。

いつか、ロン修道士の言葉を全てわかる田が来ることを、願つて。

怖いのは、生命じのちが無くなることではなくて、生きる気持ちが無くなることです。心の炎はいつまでも燃え続け、わたしたちを照らし続けてくれるでしょう。

(END)

(後書き)

実はこれ、学校の授業で書いた没小説なんです。

なんか内容が、国語の授業でやつたのととても似てしまつて。友達に読んでもらうと「なんか ×に似てるね」と言わせてしまつたので、仕方なく先生に提出することは断念したんです。

でも、せっかく書いたので、消してしまるのは勿体ないなと思つたのですよ。

ということで、ここに書かせてもらいました。

少しでも多くの人に、読んでもらえたらとてもうれしいです。

ここまで読んでくれてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189e/>

天使の言葉

2011年1月14日14時15分発行